様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：１４１０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０１０２

研究課題名（和文）中国の古代から中世に至る思想・美術の空間的歴史軸構築への模索

研究課題名（英文）Construction of the Axis of Time and Space in History of Ideas and Art during the period from the Ancient Times to the Medieval Period in China

研究代表者
片倉　望（KATAKURA, Nozomu）

三重大学・人文学部・教授

研究者番号：７０１９４７６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、思想・美術の空間的歴史軸の構築を目的とし、その第一歩として空間表現と時間表現との関わり方の変遷を明らかにした。美術に関しては、そもそも空間芸術である美術作品を空間表現の面から考察することは難しくない。しかし時間そのものの表現に美術は不向きであり、まして、古代美術ではその表現は稚拙である。従って、中国の古代美術においては雲気および龍鳳などの神獣の表現から気の思想を跡づけることこそが、時間表現を検証する手がかりとなるのかも知れないということがわかった。また、思想的面では、空間と結びついた「四神獣」の成立が五行思想の展開と深い関わりを持つものであることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：My work aims to construct the spatiotemporal axis of thoughts and art. As a first step toward this aim, I clarified how the connection between spatial and temporal expressions had changed. It is not difficult to consider art in terms of spatial expressions, because art works are indeed spatial. On the other hand, art works are not adequate to express time itself. Moreover, expressions of time in ancient art were very poor. Given this, I found that tracing thoughts of Qi in terms of expressions of divine beasts such as Yun-Qi Long-Feng might be a cue to recognize temporal expressions in Chinese ancient art. In addition, I clarified its ideological aspect: Establishing the Four Divine Beasts connected with space was deeply involved with the development of the Five Agents doctrines.

研究分野：中国哲学

キーワード：空間的歴史軸　中国古代美術　天円地方説　四神獣　楚帛書　五行思想　Ｔ字型帛画　九重の天

１．研究開始当初の背景

（１）平成 16 年度～平成 18 年度に、本研究の研究代表、及び研究分担者は、「「有限性」理解の諸相とその哲学的基礎付けに関する研究」（科学研究費補助金・基盤研究(C)）の研究分担者として、共に中国の古代から中世にかけての時間と空間の観念が、思想と美術作品とに与える影響についての研究を行った。しかしこの研究を進める過程で、時間と空間に関わるものの見方が、東洋（中国）と西洋とでは根本的に異なることを我々は改めて実感することとなった。もし、誤解を恐れずに極言するなら、新たな歴史軸でも用意しない限り、そもそも中国の思想史、美術史などという分野は成り立ち得ないのではないか、という結論に到達したのである。

（２）周知のように、近代的日本の歴史研究は、ランケの直弟子であるリースが東京帝国大学に史学教師として招聘されたことを嚆矢とするが、進歩という概念に否定的立場を取り、また、文献実証主義を標榜する彼らの学派の歴史学においても、東洋とは、モンテスキュー、ヘーゲル以来の歴史の停滞した世界以外の何ものでもなかった。東洋、とりわけその中核とされて来た中国がヨーロッパの人々の目に停滞した世界として映った理由については、ジェスイット会士達の情報素材を使ったことに、その淵源を求める尾形勇氏の研究（『中国古代の「家」と国家』岩波書店、1979 年）及び、中国の歴史を、西欧の客観性を求める歴史とは異質の、主体性を確立する目的を持った追体験の歴史として把握する増淵龍夫氏の研究（『歴史家の同時代史的考察について』岩波書店、1983 年）等に示された見解が有名であるが、実は、もう一つ、これまで等閑視されてきた空間軸を中心とした中国独特の歴史観が、このような誤解を産む背景に横たわっているのである。

（３）そもそも、正史と呼ばれる王朝公認の中国の歴史書が紀伝体で書かれていることは常識であるが、その紀伝体の持つ意味を体験的に知る者は極めて少ない。このことは、仮に翻訳でもよいとして、『史記』の全書を通読した時、多くの時間と労力とを費やしたにもかかわらず、古代より漢代に至る中国の歴史を学んだとは容易に確信できないという、敗北感にも似た読後感と見事に呼応している。すなわち、時間軸を中心とした西欧の歴史学的立場によって構築された歴史を、唯一の歴史として学んだ我々には、既に、中国的伝統の歴史、空間軸を中心とした歴史が解らなくなっているのである。もちろん、『史記』にも『漢書』にも年表があり、そこに時間軸が存在していない訳ではない。しかしながら、「本紀」に記された王朝を中心とした同心円的世界として広がる諸侯の世界（世家）、さらに個人の歴史（列伝）を個別に把握し、次にそれらを結合する様々な理論（書）を理解して社会のダイナミズムを熟知し、その上で年表（表）を用いて、いわば巨大な樹木の幹を、その生命の意志とともに成長させるという観念上の操作が、中国の歴史を理解するためには必要、不可欠とされているのである。本研究は、このような中国的歴史観を前提として、主に出土文献に見られる、神話、天文学に関わる文献、並びに美術工芸品の資料を題材とし、古代から中世に至る人々の宇宙観、世界観を探り、最終的には、新しい視角から中国の思想史と美術史とを再構築しようとする試みである。

２．研究の目的

（１）1970 年代の馬王堆漢墓関連の発掘資料、秦の始皇帝の兵馬俑、「楚帛書」を始めとする長沙子弾庫楚墓から出土した一連の帛画等々、死後の世界や天上界に関わる発掘資料は枚挙に暇がないほどである。しかしながら、それらは殆どが発掘場所に限定された個々の研究としてのみ取り扱われていて、それらを総合的に、かつ、パースペクティブに解釈する視角は未だ充分には用意されていない。従って、まず、本研究のテーマに即して、それらの発掘資料、並びに古典文献を再整理し、天上界、地下世界、そして東西南北がどのような世界として理解されて来たのかを通観できるデータベースを、研究期間の前半で、機能しうる程度に完成させることを第一の目標とする。次に、そのデータベースを使い、上下四方の世界がどのように有機的連関を持つのか、神話的解釈、天文学的解釈、そして五行思想等による解釈を交えて分析する。また、美術史的観点から、有機的に関連した立体的世界を平面として表現する意味と技法とに着目して分析、考察することにしている。

（２）従来の研究において、中国の歴史の中で空間の果たした役割に注目した研究が全く無かった訳ではない。例えば、思想史研究の上では、渡辺卓氏の墨家思想研究（『古代中国思想の研究』創文社、1973 年）には、墨家の思想的変質を、守禦した都城空間の拡大によって証明しようとした論考があり、また、『劇場都市—古代中国の世界像』（三省堂、1981 年）に始まる大室幹雄氏の一連の著作は、都市空間と田園世界の有機的連関を探り、それが中国的世界を貫く超時代的思潮であることを論証した力作である。しかしながら、前者は時間の経過とともに都城が拡大するという、ただそれだけの説明として空間領域の拡大を指摘したものであり、また、後者は本研究と同じく『史記』に描かれた世界を前提としながらも、人間が生活する現実の社会に焦点が定められているため、すべての空間を視野に入れた研究とはなっていない。本研究の目指す所は、垂直の方向に関しては、天上界から地下世界まで、また、平面方向に関しては東西南北の果てに至るまでの空間思考から、それらを有機的に結びつける神話、天文学の領域まで、すべてを網羅した空間を持続的に説明しうる歴史軸を探究する、とい

う点で、それらの先行研究とは大きく異なるものである。
（３）美術史の立場から見るなら、古代中国の宇宙観、世界観を探る視覚資料として、まず第一に挙げるべき文物は馬王堆漢墓出土のＴ字型帛画であろう。1972 年に発掘されたこの作品については日中の先行研究があり、絵の主題は、墓主である死者の天上界への昇仙であることは定説となっている。日月の輝く天上界、墓主の女性が描かれた地上界、水の流れる地下世界の三世界を描いた図様は前漢時代の宇宙観及び死生観を如実に示している。曽布川寛氏の『崑崙山への昇仙』（中央公論社、1981 年）に代表される一連の研究はこの作品に関する先駆的考察で、氏は蓋然性によって天上界を崑崙山と結論づけている。しかしこの絵が特異なＴ字型をしている理由やここで描かれた天上界を崑崙山と断じることの可否については論議の余地が現在も残されている（例えば山本陽子「長沙馬王堆漢墓出土のＴ字型帛画の形状に関する一考察」仏教芸術 253、2000 年）。現在、発掘によって知られている戦国時代から漢代の絵画的資料は、帛画の他に画像石、画像甎などがあり、立体的造形物としては博山炉や百花灯などがある。これらの美術資料について、何を表現しているのかについての考察は行われているが、思想史的な観点を強く意識した総合的かつ網羅的な調査研究は充分であるとは言いがたい。従って、本共同研究の主眼である空間軸を導入した歴史的考察により、これまでの、静止した時間の中での空間的、図像的な解釈による作品理解がより多面的総合的なものになることが期待されるのである。

３．研究の方法
（１）これまでの出土文献、並びに出土文物は、それぞれの発掘場所ごとに、また、青銅器、画像石等、出土媒体ごとに整理されてはいるものの、当然のことながら本研究のテーマに即した宇宙観、世界観を通観するための整理はなされていない。そこでまず、近年の出土文物も含めて、本研究のテーマに即した資料の整理とデータベースの構築から作業を進めなければならないと考えた。また、並行して、出土文献の読解と図形の解析等も進め、共同研究者と討議を行いながら、その都度、成果を発表するつもりでいた。
（２）最初のトラブルは東日本大震災であり、次のトラブルはタイの洪水であった。コンピュータのパーツ、とりわけハード・ディスクが二倍以上の値段となり、23 年度の入力を次年度以降に繰り越さざるを得なかったのは残念であった。しかし、その分の時間を 23 年度は文献の収集と読解に振り分けることができ、結果的には期間内に一定の成果を上げることができた。
（３）現在、構築したデータ・ベースを公開する準備を進めてはいるが、著作権の問題が足枷となり、なかなか進捗をみないでいるが可能な限り公開に踏み切りたいと考えている。

４．研究成果
（１）まず、歴史を遡って見た時、先史時代の良渚文化において玉器は既に単なる石器ではなく高度に洗練された工芸美術品の域に達し、儀礼の用途に用いられていた。そしてそれは天と地、神、王権を象徴し、天体に対する信仰の表れでもあった。時代が下って殷周時代の美術を代表する青銅器は彝器であり、祖先を祭る霊廟にも据えられたが、また、殷の時代の墓からは副葬品としても多く出土していて、その意味は死後も彝器を使って祭祀を続けることにあったと考えられる。つまり、人は死んでも生きているときと同じように祖先の霊や諸神を祀らなければいけないのであって、死んだら霊となって祖先の仲間入りをするという考えは無かった。そこには、現在という時間しか存在していなかったのである。やがて殷に代わった周の人々は、地上を統べる王は天の命を受けた天子であると信じ、また王朝交代を説明する易姓革命の考え方が生まれ、天と地の対応思想が確立されていった。それを示唆するのが天亡簋や天室の存在であり、周人は論理的な時間と空間の観念を持ち始めていたことが確認される。春秋戦国時代になると、時間や空間についての議論も進化し、美術における空間と時間の表現も発達した。戦国楚文化の蛇や細長い姿の龍鳳は生命の象徴であり、連綿と続く絡み合った姿は絶えることのない生気の造形化と考えられ、そこには永遠の時間が表現されている。曾侯乙墓の槨室は地上の住居を模した大規模なもので、棺の置かれた室だけでなく広間や倉庫や控えの間に相当する 3 室があり、そこにも多くの副葬品が納められていた。各部屋は人が歩けるほど広く、墓主は地下で生前と同じように暮らせるようになっていたのである。立派な彝器も多数発見されており祭祀は依然として重要だったが、それを含む豊かな生活を死後も送ることを願っていたのではないだろうか。そして棺を覆う装飾、雲気および龍鳳などには、まさしく生命そのものが表現されていた。そもそも美術は空間芸術であり、美術作品を空間表現の面から考察することは難しくない。しかし時間そのものの表現に美術は不向きであって、まして、古代美術ではその表現は稚拙である。従って、時間に関わる形象の表現を詳細に分析することによってのみ、作品を生み出した思想や時間の感覚を明らかにすることが期待される。中国の古代美術においては雲気および龍鳳などの神獣の表現から気の思想を跡づけることこそが、時間表現を検証する手がかりとなるのかも知れない。
（２）さて、空間と結びついた神獣として重要なものが漢代中期以降四方に配当されたいわゆる「四神獣」である。この「四神獣」

の成立は五行思想の展開と深い関わりを持つ。周知のように、五行思想が時令思想のバックボーンとして使われていく課程では、四方に五行をいかにに配当するかが大きな問題となっていた。「楚帛書」においては、神話のレベルとは言え、その難題に対して、時間と四プラス五の「九重の天」（甲篇には、四神と五木の精とが結託しても届かない高さに居なければ天帝の地位は危うい、という説明がある）という奥行きとで世界を解釈し、解決を試みている。歴史的に見れば、五行思想は中央土徳（黄色）を配置することによってやがて時令思想との融合を果たす。従って、この「楚帛書」が構想したような天の奥行きという解決法は、結果的に見れば政治思想の世界では採用されなかったことになる。しかしながら、この天の奥行きという考え方は神話の世界では継承され、やがて馬王堆漢墓から出土した「T 字型帛画」として結実することになるのである。さらにまた、女媧の四人の子供が天空を駆け巡ることによって四季が生まれる、という構想も四神獣へと引き継がれていく。確かに、「楚帛書」の神話の中では、五木との連合を考えると四神も植物系であった可能性が高い。しかし、天を回転させる動因として植物はいかにも弱い。そこで、その四人の子供を動物に置き換え、なおかつ、時に有力となりつつあった平たい円盤が回転するという極めて特殊な蓋天説の宇宙観を背景に、神話的レベルで四神獣が駆け巡る天という構図が完成したのではないだろうか。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７　件）

① 片倉望、「空間的歴史軸構築のために 中国古代における四方と上下」、『論集』（三重大学人文学部哲学･思想学系 教育学部哲学･倫理学教室編）、査読無、第 16 号、pp.56-57 pp.69-77、2014 年

② 藤田伸也、「空間的歴史軸構築のために 中国古代美術における時間と空間」、『論集』（三重大学人文学部哲学･思想学系 教育学部哲学･倫理学教室編）、査読無、第 16 号、pp.58-68、2014 年

③ 片倉望、「中国古代における儒家の因果」、秋元ひろと編『因果の探究』（三重大学出版会）、査読無、pp.131-144、2013 年

④ 藤田伸也、「中国絵画の伝統と西洋画法－画の六法と郎世寧－」、秋元ひろと編『因果の探究』（三重大学出版会）、査読無、pp.145-158、2013 年

⑤ 片倉望、「中国古代における因果応報の構造（一）」、『論集』（三重大学人文学部哲学・思想学系　教育学部哲学・倫理学教室編）、査読無、第 15 号、pp.100-115、2012 年

⑥ 藤田伸也、「中国絵画の写実－清朝洋風画家郎世寧からの回顧－」、『論集』（三重大学人文学部哲学・思想学系　教育学部哲学・倫理学教室編）、査読無、第 15 号、pp.49-63、2012 年

⑦ 片倉望、「『史記』の「自然」」、『學林』（中國藝文研究會編）、査読無、第 53･54 号、pp.132-154、2011 年

〔学会発表〕（計１　件）

① 片倉望、「空間的歴史の意義」、三重哲学会、2012 年 6 月 16 日、三重大学（三重県・津市）

〔図書〕（計０　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
片倉　望（KATAKURA, Nozomu）
三重大学・人文学部・教授
研究者番号：７０１９４７６９

(2)研究分担者
藤田　伸也（FUJITA, Shinya）
三重大学・人文学部・教授

研究者番号：２０２８３５０９

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：